

ラトヴィア放送合唱団&新日本フィルハーモニー交響楽団

精緻なアンサンブルと

聴き手を包み込むようなあたたかさ

北欧における合唱人気、そしてそのレベルの高さは、合唱愛好者にとっては有名な話である。例えば、頻繁に来日公演を行なっているスウェーデン放送合唱団の演奏を聴けば、そのことを簡単に実感できるだろう。

さて、ラトヴィア放送合唱団は、ラトヴィアがまだソ連の一部であった 1940 年に設立された。その長い歴史と、演奏技術の高さにも関わらず、日本での知名度は今ひとつで、初来日はわずか 5 年前の 2017 年だ。しかし、その演奏は日本の聴衆の度肝を抜いた。特に強いインパクトを与えたのが、ハインツ・ホリガーの大作《スカルダネッリ・ツィクルス》。微分音(半音より狭い音程)が当たり前のように頻出する超難曲の複雑極まりないスコアを、易々と演奏していたのだ。そもそもラトヴィア放送合唱団の初来日は、ホリガーの指名によって実現した。自作の演奏に極めて厳しいホリガーが彼らを指名したという事実も、この合唱団の高度な演奏技術を証明している。

合唱で精緻なアンサンブルを実現するためには、文字通りミリ単位以下の、音程や音色の調整が必須であるが、その副作用として音色が冷たくなりやすい。しかし、ラトヴィア放送合唱団のサウンドは緻密でありつつも、聴き手を包み込むようなあたたかさを兼ね備えている。

今回の演奏曲目は、モーツァルトの《レクイエム》やバッハのモテットという、説明不要の偉大な古典と、リゲティ、ヴァスクスというア・カペラの現代作品を組み合わせたもので、合唱団の多彩な魅力を一晩で楽しめる内容となっている。特に 2 曲の現代作品に注目したい。トーン・クラスターの音響から光のような協和音が浮き上がるリゲティの《ルクス・エテルナ》、鳥の鳴き声を模した効果が魅力的な、ラトヴィアの代表的な作曲家ヴァスクスの《私たちの母の名》、どちらも高度なアンサンブル能力を持った合唱団の演奏だからこそ映える作品だ。今回の公演でも極上のサウンドを堪能できるだろう。

松平 敬(バリトン歌手)